



# 『離婚記念 日』



齊藤 想

「今日は五回目の離婚記念日だね」

元妻は赤ワインを傾けながら感慨深げに呟いた。成長した娘は、元妻の横でナイフとフォークを器用に扱い、厚手のステーキを一口サイズに切り分けてから口に入れた。店内は静かなクラシックの調べが控えめに流れ、否が応でも元家族を感傷的にさせる。

「それから変わりはないか」

私は元妻に尋ねた。いまみても妻は美しい。なぜ別れてしまったのだろうか、会う度に思う。切欠はささいな口論だった。少し離れてみて、お互いに時間をかけて理解しあいましょうというのが元妻の結論だった。お互いを嫌いになって別れたわけではない。そういう意味では、幸せな離婚といえる。

私の言葉を受けて、元妻は少し寂しそうな笑顔を浮かべた。

「見ての通りよ。私は五年分老けて、娘は五年分成長したわ。智子だって来年は大学受験を迎える年齢になったのよ」

「あれからは君は何も変わっていないよ」

会話を続けるために、ワインをひとくち飲んだ。

「まるで自分だけ老けていくようで、この場にいるのが恥ずかしいぐらいだ。それにしても、智子は立派になったな」

高校の制服を着こなした智子は、背筋を伸ばしてこの場に向き合っている。智子は元妻の連れ子だ。一緒に生活した期間は二年に満たない。それでも、親子として生活を共にしたという事実は動かせない。血のつながりは無くとも、感情的にはいまでも私の娘だ。明るくて前向きな智子が、一時期とはいえ私の娘であったことを誇りに思う。

「お父さんは」と智子は答えた。このひと言が聞きたくて、離婚記念日を重ねているのかもしれない。

「仕事は順調なの？ お父さんの業界ではリストラが相次いでいると盛んに報道しているじゃない。大学受験に備えて新聞を読むようにしているけど、だんだんと心配になってきて、最近では新聞を開くのも嫌なんだから」

「バカだなあ」

私は明るく振舞った。

「いつの時代も新聞屋は大げさに書き立てるものだ。まあ、多少は厳しい時代に突入したかもしれないけど、そんなのはコップの中の嵐にすぎない。それより智子は自分の心配をしなさい。ところで目標とする大学はあるのか？」

智子は躊躇しながらも、私に促されるようにして都内に有る私立医科大学の名前を挙げた。将来は医療の分野に進みたいのだという。それを聞いた元妻の眉が曇った。優しくて明るい性格の智子であれば、素晴らしいお医者さんになるだろう。しかし、母子家庭である元妻の経済状態を考えると、大学進学は夢のまた夢だ。

「合格するには、しっかりと勉強をしないと。これからも頑張れよ」

智子ははにかみながら首を縦に動かした。大学入学の援助をする元妻に申し出ても、プライドの高い彼女は間違いなく拒絶する。だから、元妻には内緒で、来年の離婚記念日に智子のために貯めておいた通帳を、智子に渡そうと思う。離婚してから独り身が続ける私にとって、智子は唯一の娘なのだから。

「今日は楽しかったわ」

智子がお手洗いに立った際に、元妻はすっと伝票を手元に引き寄せた。伝票がテーブルから離れる前に、私は元妻の華奢な指に手のひらを重ねた。

「ここは私が払う」

「でも……」と元妻は困った表情を浮かべた。

「さあ、智子が戻ってくる前に。このようなことでいがみ合うのは、私たちの悪いクセだった。もう二度と過ちを繰り返したくない。それに、智子にはこのような姿を見せたくないだろ」

元妻はトイレの様子を気にした。中から誰かが出てくる音がした。

「そうね……いつもありがとう」

「他人行儀はよせよ。いまでも、気持ちの上では家族なのだから」

そう私は言うと、智子が席に着く前にボーイに金を支払った。

離婚記念日は私にとって生きがいのひとつだった。元妻と会うのは楽しいし、なにより智子の成長をこの目で確かめられるのが無上の喜びだった。

五年の歳月は長いようで短かった。結婚した当時は、二人とも年齢的には中年だったが、精神的には子供だった。いまなら、落ち着いた日々を過ごせる自信がある。

再来年の春には智子の大学入学という大きな節目を迎える。経済的にも精神的にも、様々な援助が必要となるだろう。いまの流れを保ち続ければ……という思いを胸に秘めて、元妻と娘に手を振った。今日はいい日だった、と家族に会えた喜びを胸にしまいこんだ。

「もうフランス料理にも飽きたよね」

元父と別れるなり、智子はぶっきらぼうに言い放った。

「まあ仕方が無いじゃない。弘樹はフランス料理なら女性は喜ぶと思っているのよ。それにしても、智子は演技力を上げたわね。あいつ、智子に入学金を援助するつもりよ」

誰に向かってでもなく、智子は笑い声を上げた。

「大学受験すら受けるつもりもないのにね。男って本当に単純なバカばかり。それはともかく、今度は美味しいお寿司を食べたいなあ」

「智子も注意なさい。お母さんが信じやすくして単純な男性を選んで結婚しているからバカばかりに見えるけど、世の中には女を食い物にしている賢い男性もたくさんいるのよ。それはそうと、今度はお寿司を食べたいの？ 少し待ってくれる……ピポパ……あ、達也さん。今年の離婚記念日だけどうしましょう。たまには個室のあるお寿司屋で智子を交えてゆっくりと……」